

公開シンポジウム「翼がつなぐ世界—鳥と人の歴史・生態・未来—」

主 催：日本学術会議統合生物学委員会・基礎生物学委員会合同ワイルドライフサイエンス分科会

共 催：京大大学生態学研究センター、京都大学野生動物研究センター

日 時：令和8（2026）年7月12日（日）13：00 ～ 16：30

場 所：オンライン開催

開催趣旨：

鳥は、陸・海・空という多様な環境へと進出した、脊椎動物の中でも極めて特徴的な分類群です。恐竜に起源を持つその進化の歴史は長く、現在も地球上の様々な生態系の中で重要な役割を果たしながら繁栄を続けています。多くの種が昼行性で人の目に触れやすいことから、鳥は古くから人間にとって身近な存在でした。食料として利用される一方、人と協働する存在でもあり、また文化の中でも特別な位置を占めてきました。

鳥の卓越した飛翔能力と高い移動性は、単に鳥自身の生存戦略にとどまらず、種子散布や捕食関係、さらには大陸間の移動を通じた生態系のつながりなど、遠く離れた地域の自然環境にも大きな影響を及ぼしてきました。一方で現代社会においては、感染症の拡散、環境変化による個体数の減少など、鳥をめぐる様々な課題が顕在化しています。

本シンポジウムでは、鳥と人との関係を過去から現在にわたって多角的に見つめ直し、歴史的な事例から最新の研究や保全の取組までを紹介します。鳥という魅力的な生物を通して、人間と自然の関係を改めて考え、これからの時代を鳥と共に生きるための新しい視点や取組について議論する場としたいと考えています。

発表要旨

「世界の自然と自然、人と人をつなぐ渡り鳥」

樋口 広芳（慶應義塾大学自然科学研究教育センター）

鳥の多くは毎年、春には北方の繁殖地へ、秋には南方の越冬地へと移動する。この長距離の季節移動、渡りは、片道だけで数千キロ、あるいは数万キロにおよぶ。途中、多くの場合、いくつかの中継地で翼を休め、エネルギーを補給する。かつて、こうした鳥の渡りは、夢とロマンの世界にとどまっていたが、近年の科学技術の発達により、渡りの経路や時間経過などの詳細が明らかになってきた。本講演では、そうした渡りの実態を示すとともに、鳥たちが渡りを通して遠く離れた国や地域の人と人をもつないでいる様子を紹介する。

「野生のウミウに強くこだわる理由—日本列島における鵜飼漁の歴史とワイルドライフ」

卯田 宗平（国立民族学博物館グローバル現象研究部）

日本列島における鵜飼漁は、1500年以上の歴史をもつ。古くから野生のウ類（ウミ

ウおよびカワウ)が捕獲され、漁に利用されてきたが、なかでも特に野生のウミウに対する強いこだわりがみられる。実際、遠地で捕獲された個体を飼い馴らし、漁で利用する実践が継承されてきた。では、なぜ日本の鵜飼漁において野生のウミウが重視されてきたのであろうか。本発表では、日本および中国における鵜飼研究の成果を踏まえつつ、日本の鵜飼漁にみられる動物利用の特質と、その文化的背景について考察する。

「森をめぐるカワウと人との関わり」

亀田 佳代子（滋賀県立琵琶湖博物館）

カワウは、魚を食べ集団で森林に巣を作って「糞」を落とすため、生態系においては水域から陸域への物質輸送の役割を持つ。カワウの「糞」は、人によって採取され肥料として使われることもある。愛知県の鵜の山では、かつて地元の人々がカワウの糞を採取し畑の肥料としていた。一方、繁殖活動により樹木を枯損し森林を衰退させるカワウは、琵琶湖の竹生島では複数回にわたり追い払いや駆除が行われていた。身近な鳥と人とのこれからの関係を考えるには、多様で幅広い関わりの歴史を知ることが大事である。

「鳥インフルエンザとワンヘルス：ヒト・動物・環境の視点から」

渡邊 登喜子（大阪大学微生物病研究所感染機構研究部門）

鳥は高い移動性をもち、国境を越えて地球規模で移動することで、生態系のつながりを維持する重要な役割を担っています。一方で、そのグローバルな移動はウイルスの拡散にも関与し、野生鳥類から家禽への感染など、社会や生態系に影響を及ぼすことがあります。本講演では、鳥インフルエンザを例に、鳥と人との関わりの中で生じる感染症について概説し、ヒト・動物・環境のつながりというワンヘルスの視点から、鳥と人との持続的な共存に向けた理解の重要性について考えます。

「野生復帰による人とコウノトリの関係性の再構築」

菊地 直樹（金沢大学先端観光科学研究所）

コウノトリの野生復帰プロジェクトとは、飼育下で繁殖したコウノトリを野外に放し、自立した個体群の形成を目指すとともに、コウノトリを軸に身近な自然とかかわる営みを再生していく活動の総体である。放鳥から20年が過ぎ、野外個体数は500を超え環境省のレッドリストでは絶滅危惧種IAからIBにランクダウンされた。個体群の形成は順調に進展しているが、人とコウノトリの関係性は、どのように変化してきたのだろうか。

「ライチョウの野生復帰と腸内細菌：ニホンライチョウ保護増殖事業—「野生の体」を取り戻すための野生復帰技術の開発—」

牛田 一成（NPO法人 希少動物種保全科学研究センター）

国の特別天然記念物であるライチョウは、2000年代以降、生息数が減少しており、生息地数も北アルプスを除くと集団が孤立分散した5ヶ所に限られることから、国の保護増殖事業が開始された。2018年からは、過去にライチョウが絶滅した中央アルプ

スヘライチョウを再導入する試みを動物園で飼育・繁殖させた個体を用いて実施してきた。本講演では、高山植物を主食とするライチョウの特性に着目し、自然採食への馴致や野生型腸内細菌叢の再構築など、新たに開発した野生復帰技術を紹介する。また、これらの技術が希少野生動物の保全や野生復帰事業全体に果たす役割について展望する。

「生殖細胞の保存と活用による希少鳥類の保全」

金子 武人（大阪公立大学大学院獣医学研究科）

希少鳥類の生息域外保全において、ペアリングによる繁殖が困難な場合、人工授精などの生殖技術の活用は個体数復元への有効な手段の一つである。配偶子保存は、生殖細胞である精子や卵子を採取し保存しておく生殖技術の一つである。生殖細胞を保存しておくことで、絶滅への危険度が高くなった種に対して、これら生殖細胞を用いた人工繁殖を実施することができ、遺伝資源の保存および遺伝的多様性の維持においても有効である。ここでは、現在我々のプロジェクトで行っている希少鳥類に応用できる生殖技術の開発および活用について紹介する。